

## 生誕 120 年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ

東京国立近代美術館(丸の内公園) 23.10.06~12.03

「棟方志功」(1903~1975)は、ヴェネチア・ピエンナーレでの受賞をはじめ、「世界のムナカタ」として国際的な評価を得た版画家で、一心不乱に版木に向かう姿は、多くの人々の記憶に刻まれている。彼が制作の拠点とした、青森・東京・富山の三つの拠点は、棟方の芸術の形成に大きな影響を与えた。



本展は、生誕 120 年を記念し関わりある三か所を軸に、自作木版画の呼称「板画」(はんが)、自作肉筆版画の呼称「倭図(やまとず)」に、「油画」(あぶらず)といった様々な領域を横断しながら、本の装飾や挿絵、包装紙などの商業デザイン、映画・テレビ・ラジオ出演に至るまで、時代特有の「メディア」を縦横無尽に駆け抜けた多岐にわたる活動を紹介している。

棟方志功 《花矢の柵(はなやのさく)》 1961年 木版



アイヌが祭りの最初に四方に美しい花矢を捧げる儀式から想をとり、日本の文化の流れがこれまで南から北に向かっていたのに対し、この矢を「北から南へ吹き返す」ことを願って作成をしたとされる作品である。

画面の騎上の人物は、中国でいう四方を司る四つの神「青竜(せいりゅう)、白虎(びゃっこ)、朱雀(すざく)、玄武(げんぶ)」を表し、右上の太陽「八咫鳥(やたがらす)」と左下の月「兎」は、「宇宙の回転をこの中におさめる」との意味であり、新築された青森県庁の壁画として飾られている。